荒木光太郎文書 720

第十一節　一九四五年五、六月頃に於ける日本の人的戦力と経済情勢

六月に入ると米空軍の本土攻撃は都市の焼撃は大都市から中都市に移行する兆を示し、又交通遮断は瀬戸内海及び本土と朝鮮、満洲とその海上交通妨害に指向された。

都市の生産施設、交通施設、住宅の焼失、國民の死傷漸増し瀬戸内海と日本海面の港湾海峡は機雷の封鎖が強化し船舶の沈没も急増した。生産と交通は急激に萎靡し、國民の必勝の確信は爆撃の被害と食糧の窮迫と沖縄戦況の不振と相俟て漸く動揺を來し初めた。

是等の事象は焦眉に迫りつつある本土防衛作戦の準備及遂行に重大なる影響をもたらさんとす情勢で楽観を許さないものがあつた。

(一)人的戦力

(1)民心の動向

國民の大部は一見政府や大本營の指導に服して不敗の傳統に對する信仰的感情と勇氣とを以て本土決戦の覚悟を固めつつある樣に見えたが他面に於て絶對勝利の信念に動揺を萌し身邊の急と相俟つて局面の轉回を渇求する氣分が濃くなつて來た。軍部や政府に對する批判も逐次盛となり其の信頼も動揺の傾向があつた。物資特に食糧の窮乏と爆撃の被害に伴ふ自己防衛の焦燥にかられ國家の急や他人の累を顧慮する精神的余裕を失つた。罹は横行し物價の「インフレ」傾向は加速度的に上昇し是等の事象は相互に因となり果となりて國民の戦争遂行は疲弊の兆を増して來た。殊に被爆地區市民には厭戦自棄的風潮を生じ、又指導的知識層の中には敗戦觀察や和平渇求氣分底流し陰に之を論議するものが多くなつた。

此の樣な情勢に乗じて一部の分子が變革的企圖を以て蠢動を初めた。

今後沖縄の作戦が終息し本土の爆撃が更に激化して被害が激増し

水陸交通が杜絶して食糧事情が一段と悪化する事態を考慮する時此の動揺を剪しつつある官民の動向には重大なる關心を拂ふ要があつた。

(2) 人的資源

人的資源は物的資源に比し比較的餘裕ある景況に在つたが本章第節既述の相次ぐ大規模の動員を充足する爲には二十才以下及四十才以上の青年及老齢者迄も兵役に適せない體格及精神力の者をも多數徴兵せざるを得ない實情にあつた。從つて築城の勞役、食糧の不足、或は戦況に對する不安等に原因して逃亡兵が漸増する有様で毎月三十名以上に達する新團があつた。此の動員の結果農業算出生産、運輸通信部門の勞働需用の充足が逼迫した。殊に食糧の不足、爆撃に對する自己防衛、施策の欠陥に far 勞力の偏在游休等に原因し效率は著しく低下した。例へば空襲下に於ける工場の出勤率は空襲直後に於ては一20%乃至30%の平静に復した後に於て六十%に過ぎず又空襲を受けない地域の工場に於ても85%に達しなかつた。

一二二

一九四四末動員に基く十四才以上六十才以下の生産人口は男女合計三七、五〇〇、〇〇〇であつて偏在其の他を顧慮し效用實數は三〇、〇〇〇、〇〇〇と算定された。其の内男子は一四、〇〇〇、〇〇〇内外で男子の中成年男子の87%が食糧軍需生産、運輸通信等に從事して居た。尚在郷軍人の數は六、三九〇、〇〇〇で兵役に召集可能の者は四、六九〇、〇〇〇であつた。而も重要産業に從事中の者の中417%が此の兵役關係者であつた。

本土作戦準備の爲一九四五年一月以降動員せられ又動員豫定の數は防衛章を合し二、〇〇〇、〇〇〇以上に達する見込であつた。此の様な狀況下に於て重要産業の勞力の充足は結局勤勞動員を最大限に實施する外特殊の緊急産業部門に重點的に配置轉換を行ふ外無かつた。

一二三

荒木光太郎文書 720

(二)経済情勢

本土作戦成否の鍵を握る

(1) 輸送力及通信

当時の経済情勢の逼迫は輸送力の衰退が根本の原因を成して居た。又今後の本土作戦遂行能力の算出、成功の成否は此衰退しつつある輸送力に對する本土の被害と日本の防衛との競争に依つて決せらるる場合に在つた。本来防衛は専に本土作戦の成否を左右する重大問題となつた。

(A) 海上輸送力

当時日本の船舶保有一百万屯以上にして稼動のものゝ大は開戦当初保有して居た六三〇万屯より百万屯に減少して居た。而も燃料の不足、米軍の潜水艦妨害荷役力の不足等に因り同事業効率著しく低下し月間船舶輸送力は四月百十八万屯、五月百十万屯、六月八十万屯の實績であつて今後の見通しは七月五十万屯、八月三十万屯、九月二十万屯以下、絶望的狀態に在つた。即ち本年秋以降は海上輸送力は皆無に立ち至ることが豫想された。而し此の數字の減退は沖縄作戦終息せば更に悪化すべく六月以降計畫的海上輸送の杜絶さへ豫慮された。

日本は本土決戦のため満洲及朝鮮より膨大なる兵力及軍需品の輸送を要する外一九四六年四月迄の絶對不足の食糧及塩を最少限二一五万屯を一九四五年四月以降に送せなければならない事情に在つた。

船舶の現況は到底其の要求に應ずることを得なかつたので食糧輸送と最少限の兵力、重需品の輸送とに限定した。滿洲から本土に導入する兵團は船腹を陸ふ高砂、草鞋を硫黄して其の代り凡有る餘席に雑穀を搭載した。此の様に徹底した輸送制限を行つたけれども雑穀及塩の輸送は第一四半期、一〇七万屯及四五万屯の計畫量に對し四月五月二ヶ月の實績は五四万屯及十九万

屯に過ぎなかつた。此の様な於個の窮迫に鑑み機帆船の利用が重視された結二四半期に船舶輸送に期待した二二六万屯の内一二〇万屯が機帆船にて賄せしむべく計畫中であつた。

(B) 鐵道輸送力

未だ米空軍は本土の鐵道に對して本格的攻撃を加へて居なかつたが當時既に空襲の被害等に因り輸送力は五月月間貨物輸送の實績は一四、五五万一千屯で近く前年度の50%に減少する虞があつた。工場業員の多數を兵役に送りたる爲、十一万人の女子從業員を採用する狀況で能率を一層低下した。其の上に關戸内海の海上交通遮断のため四日本の全地域に供給する九州、北海道石炭は其の大量が鐵道輸送に負荷された爲、軍事輸送と相俟て其の他の産業物資の輸送を一段と壓迫した。旅客輸送は極度の壓迫を受けた。米軍の爆撃を考慮すれば本年の中期以降は局地輸送に陥り米軍の本土上陸作戦の實交通破壊

爆撃が本格的に行はれる様になれば海岸沿ひ而も多數の隧道と峡谷や河川を横断する日本の鐵道は其の弱點を攻撃せられて鐵道交通は殆ど杜絶するものと考察された。關門及青函の海峡通路は特に要慮された。

斯かる推移を豫念しつつも修理資材や勞力を擬ゆ要所に配置する爲、力が無く防空施設も貧弱であつた。

(C) 隘路を形成する陸上小運送力及港湾荷役力

陸上小運送力並に港湾荷役力は資材、燃料及勞務事情並に運營體制の不備の外、本土作戦準備の爲作戦軍に多量徴用或は動員せられ末端輸送及港湾荷役の衰弱だけでなく、鐵道及港上輸送自體に對して重大なる隘路を形成しつつあつた。又港湾は米空軍の爆撃と機雷投下に依つて其の機能を停止せられる虞があつた。

(D) 通信機能

運信も亦、資材、要員等の缺乏と空襲の被害に因り其の機能を著しく阻害せられつつあつて本年中期以降に於ては各種の運信連絡は甚しく困難となる虞があつた。

(2) 基礎産業

(A) 製鋼

生産は製鋼施設の本格的稼働を未だ被つて居なかつたに拘らず輸送の運迫に依り原料炭及鉄石の取得困難となり當時の普通鋼材の生産は前年の同期の月産三六〇万屯に對し五月の實績は九〇万屯に低下し一九四五年第一四半期計畫の二七〇万屯生産も怪まれた。本年中期以降は鋼船の新造補給は全く期待し得ない實情となつた。

(B) 石炭

勞力、資材の不足を主因とする生産の低下を加ふるに輸送難の爲東京地區及西部日本中福地帶の工業生産は供炭缺乏のため極度に低下して來た。前年第一四半期の供炭量八百万屯に對し本年の供炭量は四九〇万屯程度で現下の急激を下向狀況より推測すれば本年中期以降は中福地帶の工業は供炭杜絶の爲相當廣範圍に操業停止に陥る虞が大となつた。

一二九

一二八

(C) 大型鹽

同様輸送難に因り大型鹽の運送は最少限本年度第一四半最少限計畫量四五万屯に對し四月五月の運送實績は僅かに一九万屯即ち60%に過ぎなかつた。此の爲肥料を基盤とする化學工業生産は加速度的に低下して來た。運送も杜絶する虞があるので塩金鹽、人造石油を初め火藥類の生産も窮乏する情勢に立ち至つた。

(D) 燃料

液體燃料は一九四五年三月の入港を最終として南方よりの非常輸送も完全に杜絶し貯油は逐次減少し國内生産の逼迫と相俟て本土決戦遂行上重大なる暗影を成して來た。

特に航空燃料の逼迫が著しかつた。當時陸海軍が保有してゐた航空燃料は僅かに七万竏に過ぎず月間消費は約三、三六万竏内外であつた。中期以降國内に於て供給を計畫した代燃數量は一八万八竏其の内航空燃料は、六万竏であつて而も實績の期待は更に低下が豫想され、この生産確保が緊要となり、月間消費を陸海軍共に夫々一万竏に整備し更に之をも極限して訓練を停止するが如き増量を採つて平時は本土決戦に必要なる最少限量陸軍四万竏、海軍三万竏の極量が堅まれた。

更に米空軍の來襲激化に伴ひ必須の生産、交通を防衛する爲、制限の徹底が困難なる事情に陥る場合の消費を考慮する要があつた。

次節の戦略物資の考察の如く米軍が本土の來攻を急ぐことなく空軍に依る攻撃を更に大規模に長期に亘り継續する場合次に記述する食糧問題や航空の生産民需問題と共に燃料問題は戦争遂行を

困難ならしめる要因となる虞があつた。

是等の要素と後述する作戦上の關係を勘案すれば日本として

に一九四五年十月以降數ケ月間が決戦に最も適した期間であつた。

(イ)「アルミニウム」其の他

「アルミニウム」の政得は一九四三年は西方資源の還送高調し十四万屯に達したが本年度第一四半期は九千屯に減少した。

銅鉛も一九四三年の十万二千屯に對し本年の第一四半期は一万八千屯に下向した。

(8) 重要兵器の生産

航空機を初め重要兵器の生産は米空軍の攻撃激化に伴ふて前記の如く勞力の不足と交通の還迫と海運産業の衰頽を伴つて愈〻其の生産量を低下した。元月頃の重要兵器の生産狀況は飛行機一六〇〇機、各種戦車十二輌、高射砲六一門、歩兵用火砲五五門、砲兵

用火能力目安値三七円以外分、自動車燃料は七二一円、各種特殊用
舟艇燃料　薪と云ふ資源なる燃料で今後益々低下が豫想された。

(4) 食糧事情

経済情勢中最も脆弱なるものは食糧事情であつた。即ち各種統制令、諸資材等の代替主食20%を含む一人一日當り二合三勺の配給は以前の大部分輸入食糧の減少を補塡し得ることを前提としても一割の節減を要するが為で防空備蓄繰延すら放出するに至つた。一九四五年度の米穀総需要量七千七百九五万四千石中朝鮮、満洲よりの輸入見込は其の5.9%に達した。即ち米穀一五七万二千石、雑穀二九五万七千石であつた。食糧の如きは生理的必要の最小量の供給さへ疑念されれた。

而も大部食糧の輸送可能量は第一四半期は60%計画量に過ぎず第二四半期に於ても第一四半期計畫の殆部を輸入し得ることさへ疑念される事情で本年度輸入決定の65%内外に止る見込みであつた。

本年の端境期に最大の食糧供給源が断絶せられた。戦後の輸入は海上交通の杜絶のため期待し得なかつた。而も大量の人馬の兵役動員、築城奉仕等の為農村の労力は極度に弗底し生産の減少を免れない上に重税が苦しく年大した。更に豪雨されたのは米麦の収穫直前に於ける水田湛水と交通破壊に伴ふ國内輸送の停滞と天候の災厄であつた。若し是等の天候の何れかが伴へば局地的に饑餓状態を現出するの虞れがあつた。米麦の來攻万一に於ては戦場數百万の國民が餓死と食糧との間もしつを「ヂレンマ」に陥ることが於念された。燃料の場合と同様若し米麦が本土上陸を延期し本土の空襲と封鎖とを大規模に五月期に行ふ場合を採るならば一九四六年度見通のつかぬ更に不安な状況に立ち至る此の食糧問題は極めて深刻なる事態に立ち到る算が多かつた。即ち是を九州の一例に就て見ると決戦用の農産物集積に八月頃全兵力の二、五ケ月分に達する予定で作戦準備面の需用は別に常續補給を行ふ計畫であ

荒木光太郎文書 720

つたか宮時早くも停滯相續し、決戰用糧秩を吹ひ込んでゐた。今後米穀の上陸が絶び交通が絶滅すれば結局決戰用糧秩を消費し其の補充は國民に對する非常用糧秩の準備は殆ど無かつた。其の結果は遂に國民の動力に影響がある許りで無く差迫つた。對迫の食糧と國民との道義的結合を破壞する現象も生ずるであらう。是を救濟する方策は斷決する方策は唯部隊か國民と共に難苦に從事するより外に無く五月頃より一部は開始して居た。

(5) 濫費する「インフレ」傾向

「証」（資料を後次第入之）

(三)政府及大本營の國民指導と經濟對策

政府及大本營は逼迫する內外の情勢を檢討して之に對應する戰爭指導の方策就中國民指導と經濟對策の基本方針を決定する爲六月八日御前會議を開催した。

此の會議に於て概ね以上の樣な情勢が確認された。

政府及大本營は此の困難なる情勢を克服して帝國傳統の國民的信念と地の利、人の和とを以て國體護持、皇土保衞のため飽くまで戰爭を完遂すべく決意した。席上歸本總理大臣は本會議に報告せられたる統帥部の本土作戰に關する決意と自信とに對し意を强くする旨述べたる後本會議の決意を遂行する爲には國家の必死の努力と果敢迅速なる斷行を絕對條件とする旨を要望し自ら其の陣頭に立たん悲壯なる決意を表明した。

(1)國民指導

先づ國民指導に於ては國民義勇隊の組織を中軸として國民戰爭態勢を確立して全國民の結束を固め物的國力、就中重要產業と食糧の確保に當らせる外官に協力して築城や軍需品の輸送に努力させる事とした。

此の國民義勇隊は六月二十二日義勇兵役法に依り公布された即ち十五才より六十才迄の男子と十七才より四十才迄の女子の中病弱者、妊婦を除く全部を網羅し、學校、工場、交通機關等の集團職域別若しくは一般行政地區每の地域別との兩種に分かち軍隊式に編成され夫々現在の職域を通じて部隊的規律に基いて其の職域に奉仕する仕組であつた。尙此の國民義勇隊は米軍が來攻し其の地域が戰場となれば國民義勇戰鬪隊となりて作戰軍の爲に生產、輸送、築城、防空、衞生勤務に服し更に其の一部は武裝して軍の戰鬪に參加する樣に計畫された。

老人や病弱者、妊婦等は米軍の來攻前に非戰場地帶に退避させる樣に計畫された。

「註」此の數百万に上る戦場國民の退避若くは作戦參加は退避施設、避難行動、食糧問題、衛生施設乃至素質訓練未熟なる多數の國民特に女子を決戦場―沿岸地域に滞置し戦場に行動せしむることの可能性等非常に困難な問題が伏在した。後述する作戦軍が水際撃滅の主義に徹せざるを得なかつた一因も此の戦場國民の處理の困難性に在つたのである。

(2) 経濟緊急對策

前述の様に當時の経濟情勢は何れも極めて困難な事情に在つたが就中食糧（含鹽）の輸入と特定兵器（特攻兵器―飛行機、舟艇及高射砲等）及燃料の生産、交通防衛は本土作戦の成否を按つ重大問題となつた。

政府及大本營は此の三つの重要要求と其の基礎となる石炭の増産増送を今後の重點として全力を傾注する決意を固めた。

即ち第二四半期に於ては當時保有の輸送力の中汽船一〇六万屯の中大陸食糧（含鹽）搬送に五十六万屯、其の他に十万屯を割し残りの四〇万屯中三二万屯を石炭輸送に配分した。汽船の欠乏を補ふ爲に内地海上輸送は機帆船の利用に徹底し一二〇万屯を期待し其の内一〇五万屯を石炭輸送に配當した。又鐵道輸送力三七〇万屯を期待し石炭輸送の総力を成してゐる青函連絡に八五万屯の輸送力中石炭に四五万屯、關門連絡に一九〇万屯の輸送力中石炭に一三〇万屯を配分した。

第二四半期の食糧輸入の計畫は雑穀四十一万五千屯、鹽十五万屯を期待し又同期間の生産は石炭の供給四三〇万屯（褐炭、泥炭、火薬、液體燃料、特定兵器に重點的に配當す）液體燃料六万キロ、鐵鋼二七万屯―アルミニュム―九千二百屯を計畫した。

然し是等の計畫數字は相對的に量に對し遙かに不足せる數量であつた丈でなく此の數量も多分に未知數の要素を假定として努力の目標數量を計上したものが多く從來の例に徴しても實績の期待は非常に困難が豫想せられたものである。

荒木光太郎文書 720

第十二節　米軍の採るべき略奪判断

一九四五年六月初め頃既述の如く沖縄方面の戦局は決定的に悪化し、大事との交通は危殆に瀕し本土の燃料機等は急激に増大した。「マリヤナ」基地の米軍の数は一〇〇〇機に近く沖縄の基地は作戦に専行して急速に増強、増設せられつつあつた。一方欧羅巴や米本國からの太平洋基地に向ふ兵力輸送の船舶の通行が通信諜報によつて推察せられた。市部日本太平洋岸に対する偵察行動と目せられる米機の活動が逐次活潑となる傾向が統計に現はれた。米軍の太平洋方面空地両軍指揮組織の改編等と照合観察の結果沖縄、比島、「マリヤナ」方面の進攻基地に於て大規模の次期作戦準備が著々発展しつつある事が想察された。此の様な情勢に対處し大本營は米軍が次で採るべき戦略に就き検討を加へた。米軍の次期戦略企図に就き検討された要諸は次の通りであつた。

一九四五年五月頃ノ米軍ノ戦略判断

其の一は早期終戦を企図し日本本土に於ける日米両地上軍の短期決戦を強行するか或は新なる作戦を避けて先づ其の侵攻なる空海軍の威力を以て徹底した封鎖と爆撃作戦とを以て日本の屈服を策するかの検討であつた。前者の政策を採るべしとなす根拠は既に於ける戦争が終結したる現情勢下に在り再太平洋戦争の終息が遅延するのは米國として は對内對外共に政治的に困難な問題を派生すること及米軍の太平洋に於ける既往の強引、急調なる作戦の痕跡と全力を太平洋戦争に傾倒し待る米軍は既に制海制空権を失ひ孤立狀態に在る日本本土に對し短期決戦の強行に必要なる力と自信とを有して居り而も日本民族に對する米軍の考察は本土陸軍主力を撃破するに非ざれば屈服せずと判断したるならん等に在つた。後者の戦略を採るべしとなす根拠は米軍は既に孤立疲弊しつつある日本の屈服は偏大なる米空海軍の封鎖と焼爆戦略に依り期待しうることと並に日本本土の上陸攻撃は日本軍民の必死而も強烈なる反撃に遭ひ甚大なる兵員の犠牲を招來することを認め新たな

危険と損害を伴ふ作戦を避遁するであらう。期待に反し日本が戦意を失はない場合に於ても此の中間に位り日本人物心戦力を徹底的に破壊疲弊せしめたる後上陸作戦を遂行するを有利とするとの見解を持つであらうとみた。何れの場合に於ても米空海の激烈なる攻撃を必至と見る見解は一致して居た。

其の二は作戦の方向と目的と時機と兵力との検討とであつた。米軍が短期決戦を採る場合其の作戦方向は一挙に本土に向ふか或は先づ南西諸島、小笠原群島の占領を決行し或は中北支沿岸要域若くは南鮮、特に済州島に基地を推進したる後本土に向ふかの二様が検討された。前者は米軍現在の戦略発展状況と琉球諸島と沖縄本島に基地を占め一般作戦方向の就線が日本本土を指しているごとく米空軍の本土に對する攻撃激化の傾向と日本本土の戦備未完に乗ぜんとすることを重視する拙速短期決戦の主張であり、後者は米軍は本土作戦に先立ち海空軍を以て徹底的の破壊を企図すべく之が爲本土攻撃に使用すべき全航空戦力の

展開は「マリヤナ」、沖縄、硫黄島基地のみでは不足なるを以て更に大なる基地の推進を企圖するであらうとなす合理的短期決戦の主張である。尚此の主張は米軍が對蘇支攻略上の顧慮を重視すべきことを其の理由の一に数へてある。後者の基地推進作戦は夏季の候早期に實施するものと判断した。使用兵力は南西諸島及小笠原群島に對しては一乃至二箇師團、上海に對しては二〇箇師團内外、其の他は七乃至八箇師團と推量した。

尚一挙に本土に向ふ案の中にも直路南東に進攻する作戦と先づ九州、四國に空海基地を推進したる後南東に向ふ案があつたが後者の判断が有力であつた。其の理由は南東に於ける最終最大の決戦に備へ而も之に依り南東を孤立疲弊せしむる整實なる作戦を採るべしとなすに在つた。

其の細部の考察は第二章の第一節に於て記述することとする

封鎖と焼爆戦略を採る場合に於ても南西諸島小笠原群島、中北支沿岸要域若くは濟州島、九州進攻を攻略し航空基地の推進擴張を企圖するであらうと判断された。此の進攻作戦の時機と兵力との判断は略同様であつた。

當時大本營が本土進攻作戦に參加する米軍の兵力を次表第一の様に判断した更に該者の參考に供する為に日本軍の本土重要方面防衛兵力を次表第二に附記する。

荒木光太郎文書 720

第一

一九四五年九月頃に於ける本土攻略に参加すべき米軍戦兵力の推定概見表

地上兵力	歩兵師團	70
	装甲師團	10
	空輸師團	4
	騎兵師團	1
	海兵師團	8
	計	93
海上兵力	航母	26
	特空母	74
	戦艦	24
	巡洋艦	36
	駆逐艦	254
	計	424
航空戦力（基地航空）	B29	1550
	B24 B17	1950
	戦闘機其の他	3460
	計	6960

備考

一、地上兵力の來攻兵團數は船舶の制限に依り當初二〇箇師團内外と豫想す。尚本表の數字は此頃迄に歐羅巴戦線より三〇箇師團を又本國より五月以降毎月二ケ師團を太平洋に派遣するものと假定し又太平洋各地域に配置すべき兵力を含むものである。

二、海上兵力は沖縄作戦の艦隊を加味し又新空母「アンテエタム」「タラワ」「ボクサー」を参加するものとし「サラトガ」「レンジャー」は訓練用と見て含ましめて居ない。

三、航空兵力は「マリアナ」、硫黄島、南西諸島、比島方面に在る航空推定戦力を合したものである。

第二

臨東及九州決戦に於ける日本軍の兵力概見表

区分		地上兵力							海上兵力（可動のもののみ）			航空兵力
		一般師團		配備師團	轉用師團	一般旅團	戰車師團	旅團	高射師團	特攻舟艇	駆逐艦	潜水艦	
臨東		二七		（九）一七	（一）一〇	（一）八	（三）二	二	（二）一	約八〇〇〇			約八〇〇〇機 内約六〇〇〇機ガ特攻機
九州		一八	（七）一四	四		（三）五（含下關）		三	（一）一	約二一〇〇 内八〇〇八隊軍舟	二三	三五	

備考

(A)陸上兵力

一、本表の數字は八月頃完結豫定の第三次兵備を含み十月頃の豫想戰力を示す。（）内は五月上旬頃の分但し其の約そは裝備未完である島嶼守備兵團は本表より除いてある。

二、本表の外海軍基地部隊中四戰參加豫定のもの

臨東二万　九州　一万六千

三、轉用兵團は第一次の豫定のみ

四、本表の外臨東を除く本州及四國に計一般師團二〇、一般旅團七戰車旅團一、高射砲師團一を有して居た。

轉用兵團は主として此の地區の兵團を豫定して居た。

(B)海上兵力

一、特攻舟艇の數は實動見込數を掲示した。

二、海上兵力は外に戰艦四、空母五、巡洋艦二を有し戰艦、空母は何れも損傷し又燃料の關係上港灣防空に充當する。

三、米軍が先づ九州方面に來攻する場合は全力を之に投入する計畫であつた。

(C)航空兵力

米軍が先づ九州方面に來攻する場合は全力を投入する豫定であつた。

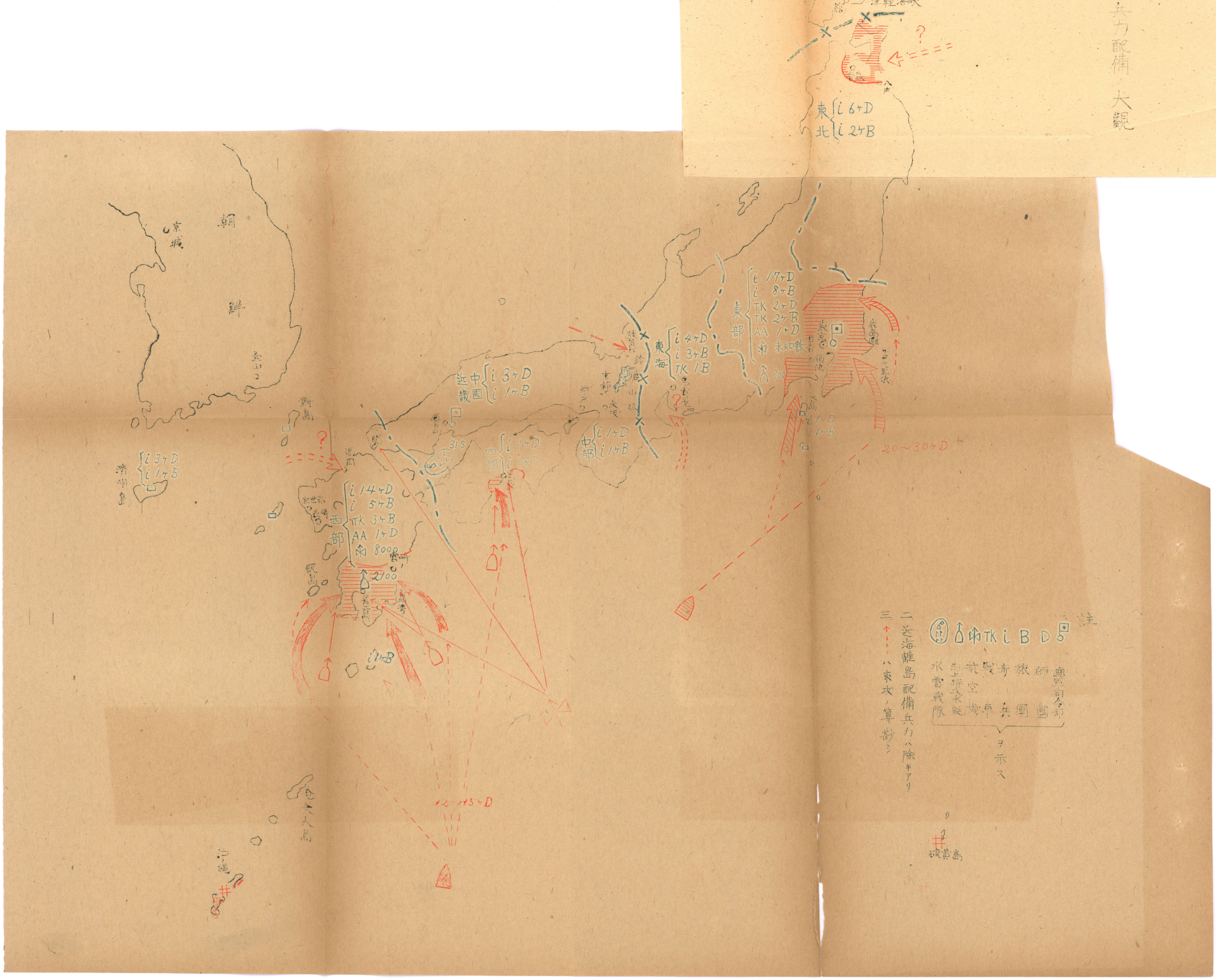
以上の検討を遂げたる後大本營は次の要旨の判断を得之を六月八日御前會議に附議して爾後に於ける戦争指導策定の基礎とした。

「米軍の戦略企圖は帝國の本土に進攻して短期決戦を企圖するに在る之が爲今後本土に対する航空作戦の一層強化し國土を半身不隨の狀態に陥れ而も本土各地區を孤立せしめつつ本土の要域特に關東地方に壓倒的兵力を以て上陸作戦を決行するであらう。

而し此の作戦に先ち九州、四國若くは南鮮方面（濟州島を含む）に進攻し強大互相援護たる空海基地を建設し本土の徹底的破壊と堅實なる制東地方上陸作戦の實施を企圖する算が多い尚同樣の目的及將來の大陸政策の見地より揚子江下流要域若くは山東半島に進攻すること無きを保し難い。是等の空海基地推進作戦は七月頃以降隨時發動せらるべく制東作戦は本年秋季以降之を豫勤せねばならぬ。又米軍が日本の抵抗力が極度に低下しありと判断し而も米軍の作戦準備が之を許す狀況に進展して居る場合は直路關東地方に進攻する作戦を

採ることもあり得る」

「註」大本營は推理の上では米軍の本土來攻時機を颱風季節後即ち九月以降と判断しつつも或て七月以降隨時生起すべしと主張したのは既往米軍の我が判断を超ゆる急速なる反攻速度を考慮し大事を採つた點の外に本土決戦準備の促進を政府側に督勵せんとする政策的意圖や各軍の作戦準備を牽制せんとする考慮が作用して居た。

荒木光太郎文書 720

米軍本土攻撃計畫ノ判斷ト之ニ對スル 8/1945 完成豫定ノ日本軍兵力配備ノ大觀